



## 彼女の話

---

仕事の疲れを引きずりながら、ぼんやりと地下鉄の駅のホームに立つ。ホームに人はまばらで、照明の青白い光が、疲れた人々をぼんやり照らしだしている。

電車が滑りこんできて、生暖かい空気が顔にぶつかり、眉間に皺を寄せる。手にしていた鞆を持ちかえて、開いた扉から吐き出される人がいなくなるのを待って電車に乗り込む。

扉のすぐ傍の手すりに寄りかかり、ホームと電車の間でできた隙間をぼんやりと見つめる。じっと見ていると、その暗がりには、何かいるのに気づく。じっと見つめていると、それは、人の目であることが分かる。えっ、まさか。そう呟いて、じっと見ていると、それは、こちらをじっと見つめ返してくる。そこから目を離すことができずにいた。

ふいに、背中にもものすごい衝撃を感じて、私は前につんのめった。体がホームに向かって落ちていくのを抵抗する間もなく、私はただそれを受け止めるしかなかった。

ホームに顔を打ちつけるという恐怖より、ホームと電車の隙間に吸い込まれると、何故か思った。その吸い込まれる感じが、とにかく恐ろしかった。目に痛みを感じるくらい強く瞼を閉じて、得体のしれない恐怖が去るのを待った。

目を開くと、辺りが暗闇に包まれていた。あれ、おかしいなと思いつつ、瞬きを繰り返すが、目は闇に包まれたままだった。視線を上げると、ふいに光の帯のようなものが現れた。

その帯の上を何かが行き来していると分かる。それは、人の靴底であると気づいた。無数の靴底が見え隠れして、轟音とともに、光の帯が消える。そして辺りは闇に包まれた。そこには、しんとした暗闇と静けさしかなかった。

それからどのくらいこの闇と、電車とホームの間の空間にいただろう。時間という概念が、ぼんやり抜け落ちたようだった。あまりに人と話すことがなかったから、話すという行為を忘れた。

言葉を持たず、ただ闇と、光の帯が消えては現れるたび、人の靴底を見つめ続けた。じっと、誰かが気づいてくれるのを待つだけだった。

最初は、声を張り上げて、無数の靴底に向かって、助けてくれと叫び続けた。けれど、無駄な事だった。誰もこの奇妙な空間に、目を向けてくれる人はいなかった。規則的に光の帯が現れて、靴底が見え、光の帯が消えるということばかりが、繰り返された。

ある時、いつものように光の帯を見つめていた。すると、誰かが私を見ていることに気づいた。それは、私によく似た人物で、その人物は、私が見つめていると、目を凝らしてじっと見つめ返してくる。

そして、その人物の体が、押されこちらに倒れこんできた。ああ、この人も私のように吸い込まれるんだろうと、ぼんやりと見ていた。徐々に、こちらにその人は、近づいてくる。その距離は、少しずつ短くなっていく。まるで、スローモーションのように、時間が長く感じられた。私とその人の間には、ふわりとした柔らかな光が、満ちていた。それで不思議と恐怖は、なかった。

ぶつかると思った瞬間、私はゆっくりと瞼を閉じた。目を閉じるという行為を私は、忘れていたはずなのに、いとも簡単に、そうしたことをしていた。

ふと、幼い頃にずっと乗っていた自転車のことを思い出した。とても大切にしていたのに、気づくと何年も乗っていかなかった自転車。久しぶりに乗ってみると、頬にあたる風の心地良さや空気の匂い。自分が何でも出来ると、錯覚してしまうほどの楽しい感覚まで、はっきりと思い出した。何故、私はこの感じを忘れていたのだろう。

すると、うっすらと瞼の向こうに、待ち焦がれていた光があることに気がついた。それは、体全体を覆うような強い光だったからだ。ゆっくりと恐る恐る目を開く。目の前の光景に私は、しばらく呆然とした。辺りが真っ白な世界に包まれていたからだ。

最初は、何が起きたのか、全く検討がつかなかった。しかし、真っ白な世界が、徐々に私の見慣れた景色として、目の前に広がっていくのが分かった。

ゆるゆると辺りを見回すと、最初にもたれていた電車の扉付近に私はいた。電車とホームの間を恐る恐る見ると、ただ細い帯状の暗闇だけがそこに広がっている。

ついさっきまであった感覚が、消えていることに、私は気づいた。それを思い出そうと、電車とホームの間を見ていると、次の瞬間、そこに何かが見えた気がした。空気の抜ける音がして、電車の扉が締まり、私はそれを、よく見る事が出来なかった。